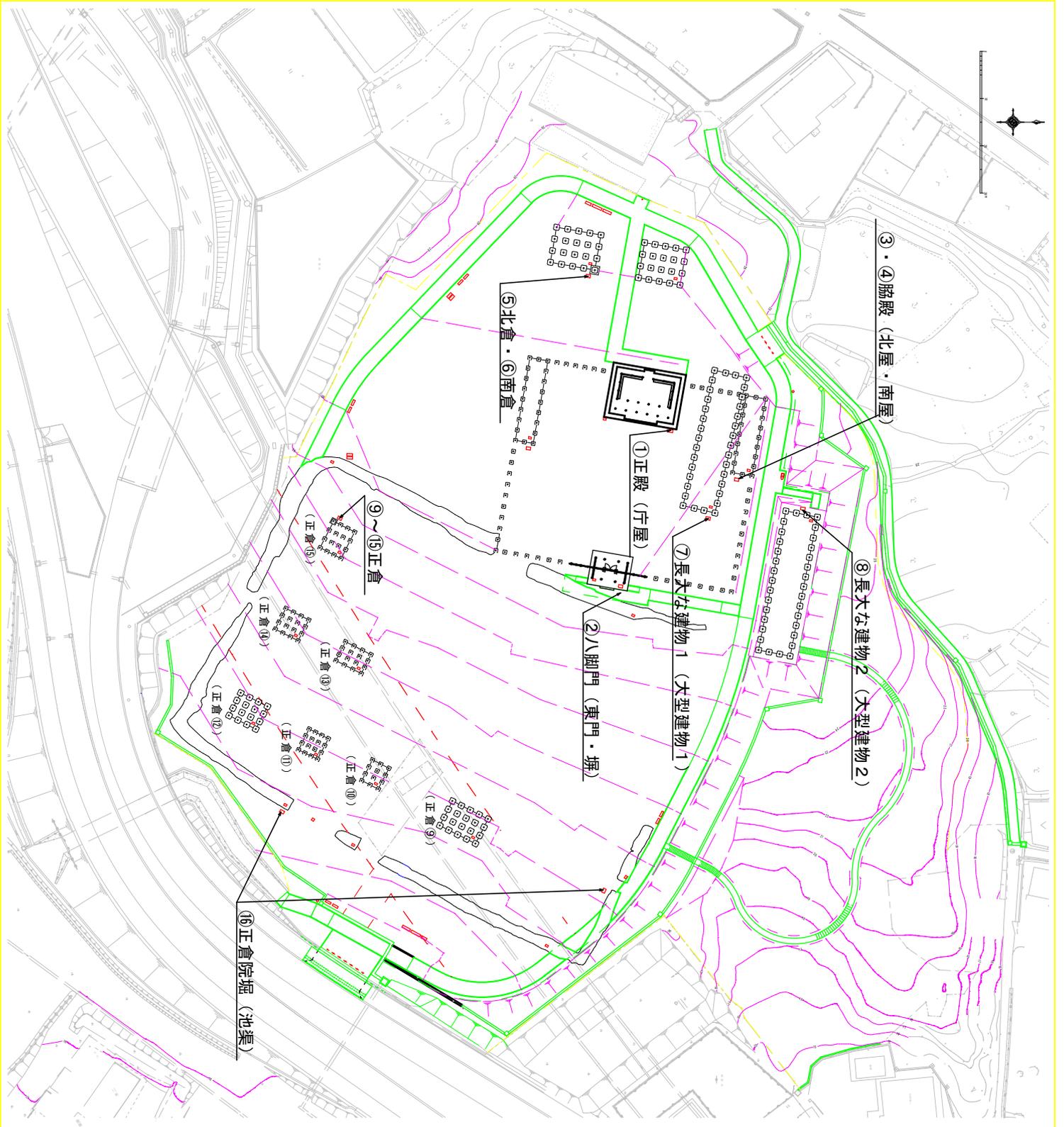


【資料 5】  
説明板配置図



工事名	京都大規模官報遺跡復原整備工事
施工箇所名	向日町市大宮町地区内
図面の種類	復原計画図-3
縮尺	A1:1/400
制定機関係	京都市
制定機関係	京都市

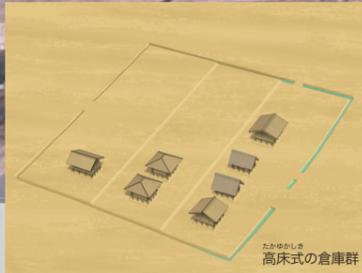
# 1 発信！朝明郡の情報センター

あさけ

## 建物群の移り変わりとお各時期の特徴

久留倍官衙遺跡の建物群は、掘立柱建物の柱穴の重なりや建物の向く方位の違いなどから大きく一期から三期の三時期に分かれます。一期は、東向きの正殿とその左右に脇殿が建てられ、それらに連なる塀の東部中央に八脚門が配置されており、郡衙政庁と考えられます。また、二期には、東西に長くて大きな建物を中心とする建物群が、三期では二期の建物群に、新たに高床式の倉庫群が建てられます。このように、久留倍官衙遺跡では時期により性格を変えていったようです。また、通常、役所や寺院などは南を正面としますが、久留倍官衙遺跡の建物群は東を正面とするのが特徴です。

- ・掘立柱建物の柱穴の重なりや建物の向く方位の違いなどから大きく一期から三期の三時期に分かれます。
- ・八脚門：四本の親柱の前後に四本ずつ、計八本の柱を立てた門。八足門とも。
- ・郡衙政庁：郡の政治や儀式を執り行う中心的な建物群。その中でも、最も中心的で重要な建物を正殿と言い、正殿の正面左右などに設けられた建物を脇殿と呼んでいます。
- ・一方、一期の建物群を、都と地方を結ぶ官道である東海道沿いに置かれた駅家\*ではないかとする説もあります。
- ・駅家：人馬を配し、公的な使者に乗り換えの馬や、宿舎、食料等を提供する施設。



### ●Ⅲ期（8世紀後半から9世紀末）

Ⅲ期には、Ⅱ期の建物群に加えて、高床式の倉庫群（正倉）で構成される正倉院が設けられます。正倉には、もみ殻のついた稲等が保管されました。



正倉には税として徴収された稲がおさめられています。久留倍官衙遺跡に隣接する大矢知山畑遺跡からは、役所の仕事で使われる風字硯\*が出土していて、Ⅲ期の遺構との関係を考える上で注目されます。

\* 風字硯…硯の一種。「几」の字の形をしているもの。

### ●Ⅱ期（8世紀中頃～8世紀後半）

政庁があった場所を中心に建替えられた、東西方向に長い大規模な建物を中心とする建物群です。この建物群の中に聖武天皇の行幸に関する建物が存在する可能性があります。



この長大な建物は、稲穂が付いた状態の稲をたくわえた屋とよばれる倉庫と考えられます。たくわえられた稲は出挙\*に用いられ、建物前の広場はその作業の場所として使われたと考えられます。

\* 出挙…稲の種もみを貸付け、利息を取る制度。

### ●Ⅰ期（7世紀後半から8世紀前半）

丘陵の頂上の平坦部からその部分まで遺構が見つかっていますが、中心となるのは正殿と2棟の脇殿、八脚門と、それぞれに連なる塀で囲まれた郡役所の建物群（郡衙政庁）です。



正殿は、政務などに使われた建物で、その前の広場も含めた空間を使って、さまざまな儀式や行事等が行われました。脇殿は日常の事務を行う建物と考えられます。また、八脚門は宮殿や寺院などでも用いられた立派な形式の門です。

展示ケース

せいでん ちょうや  
正殿(庁屋)① I期 (説明板 1/8)

11.3m×7.4m 面積 83.6㎡ (畳<sup>たたみ</sup>52枚分)

高さ 5.3m、柱の太さ 27 cm、柱間<sup>はしらま</sup>1.8~2.2m

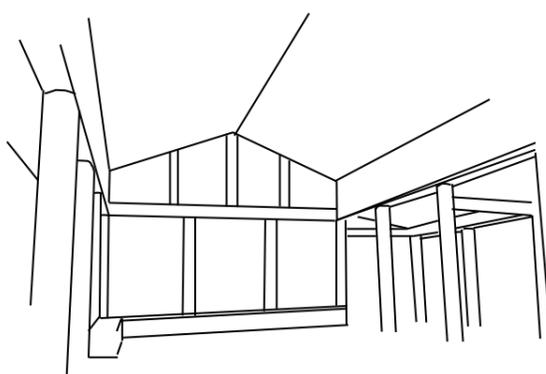
せいちょう  
政庁の中心の建物です。正殿の前は、多くの人が集まって儀式や宴会<sup>ぎしき えんかい</sup>を行うための広場になっていました。

今建てられている建物は、発掘調査でみつかった正殿の跡<sup>あと</sup>の真上に、現代の素材と工法で古代風の建物を建て、正殿の位置を示したものです。

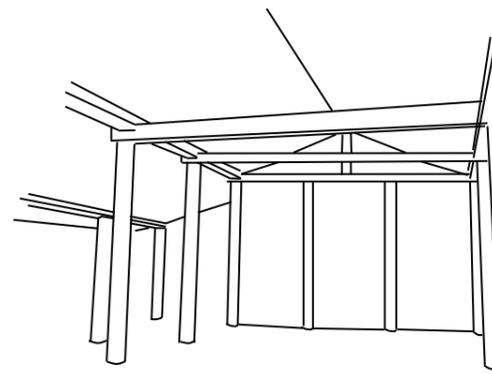
〈発掘調査の様子〉



〈現地表示と復元案の違い〉



現地表示



復元案

はっきやくもん ひがしもん へい  
八脚門（東門・塀）② I期（説明板 2/8）

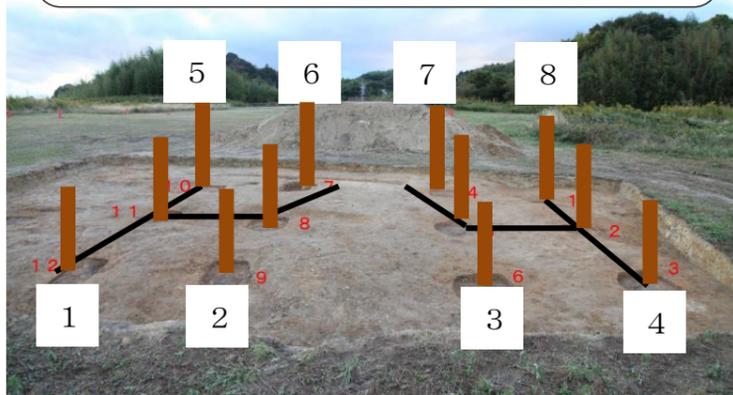
6.5m×4.1m 面積 26.7 m<sup>2</sup>（畳17枚分）

高さ 4.8m、柱の太さ 27.6 cm、柱間 1.9~3.0m

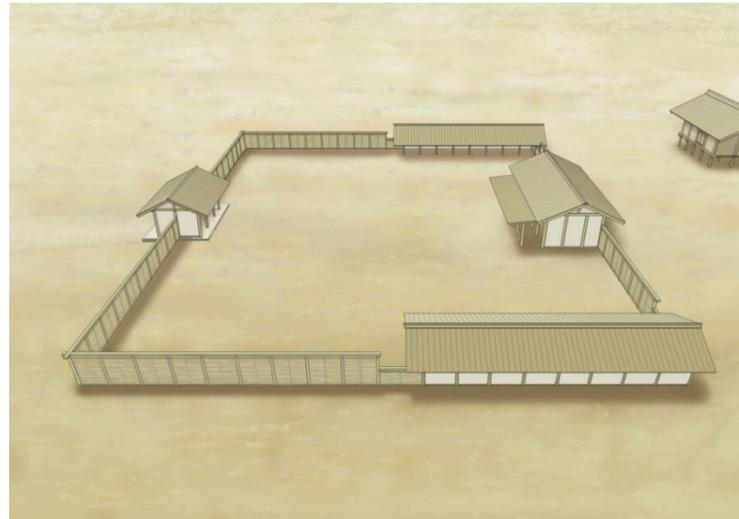
古代の地方の役所では、<sup>せいちょう</sup>政庁の正門には、八脚門という格式の高い門が採用されました。古代の役所のほとんどは、正門は南にありますが、久留倍官衙遺跡の場合は東にあります。また政庁は、塀で囲まれていました。

〈八脚門の説明〉

柱は12本ありますが、内側と外側に見える柱8本を数えて八脚門といいます。



〈政庁イメージ図〉



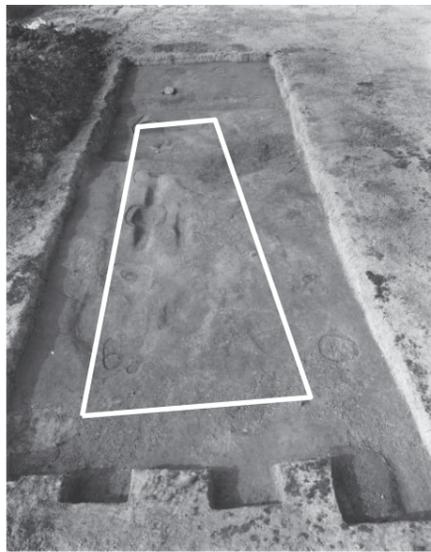
わきでん  
脇殿③・④（北屋・南屋）I期

（説明板 3/8）

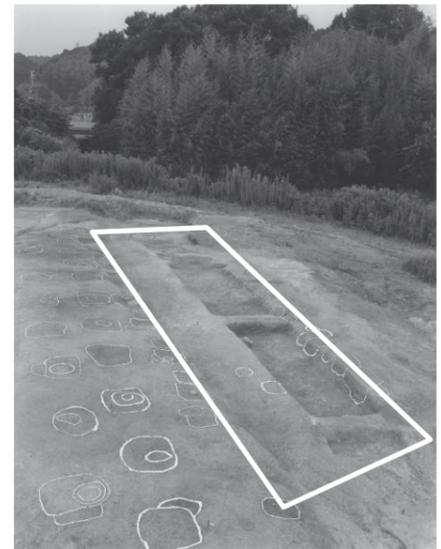
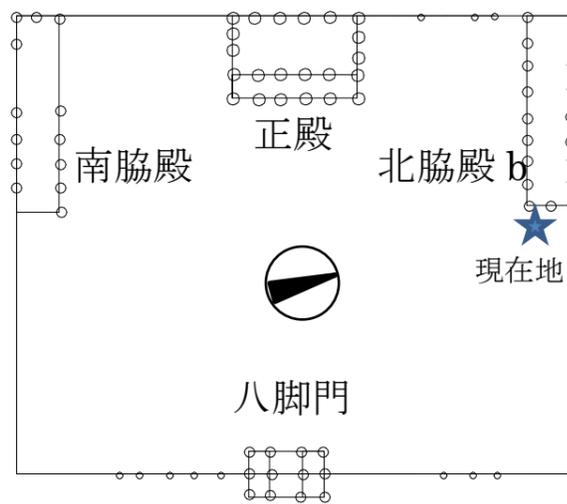
北脇殿 17.2m×4.1m 面積 70.5 m<sup>2</sup>（畳 44枚分） 柱間 1.8~2.2m  
南脇殿 17.8m×3.9m 面積 69.4 m<sup>2</sup>（畳 43枚分） 柱間 2.0~2.3m

せいでん ちょうや  
正殿（庁屋）の左右にある建物です。役所の長官の配下の役人が、儀式や  
えんかい ちゃくざ  
宴会の時に着座する場であったと考えられます。

はくつ  
〈正殿との位置関係と発掘調査の様子〉



南脇殿



北脇殿

# 北倉⑤・南倉⑥ I期

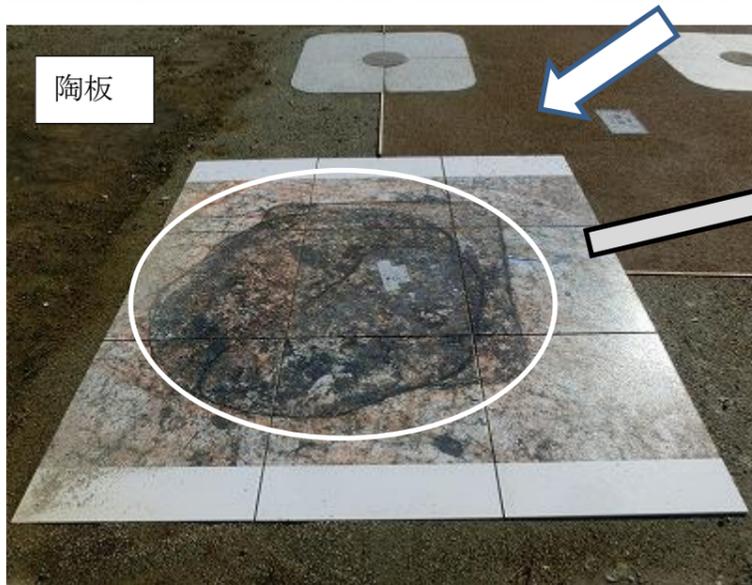
(説明板 4/8)

北倉 8.9m×7.6m 面積 67.6㎡ (畳42枚分) 柱間 2.2~2.5m

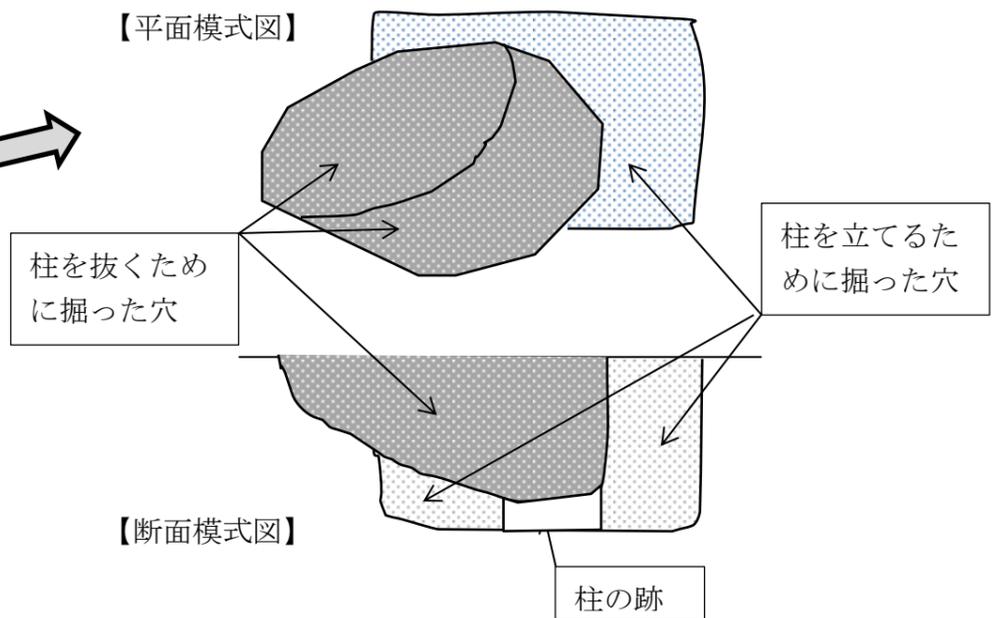
南倉 9.5m×8.0m 面積 76.0㎡ (畳47枚分) 柱間 2.4~2.7m

政庁に付属していた大型の倉庫です。中には、文書、武器、穀物などが納められていたと考えられます。

## <発掘調査の様子>



【平面模式図】



【断面模式図】

# 長大な建物 1 (大型建物 1) ⑦ <sup>おおがた</sup> Ⅱ期 (説明板 5/8)

29.4m×6.9m 面積 202.9 m<sup>2</sup> (畳 125 枚分) <sup>たたみ</sup> 柱間 2.1~2.4m

最も大きい建物で、南側は広場になっていました。聖武天皇の東国行幸 <sup>しょうむてんのう とうこくぎょうこう</sup> に関わる建物の可能性が指摘 <sup>してき</sup> されています。

<発掘調査の様子>



<イメージ図>

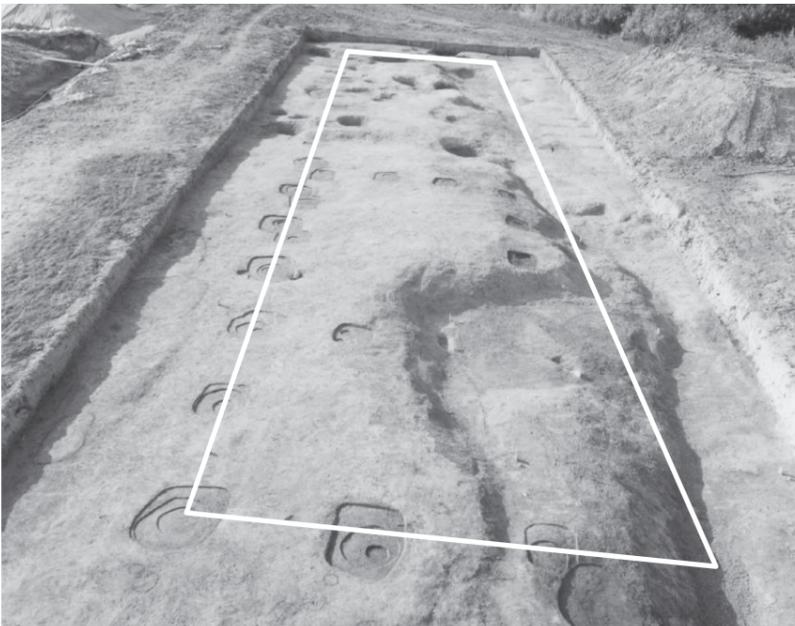


## 長大な建物2(大型建物2)⑧ おおがた Ⅱ期 (説明板 6/8)

30m×6.8m 面積 202.5 m<sup>2</sup> (たたみ 畳 125 枚分) 柱間 2.1~2.3m

大型建物1 とほぼ同じ面積で、一段下がった位置に建てられた細長い建物です。この建物には、税として納められたおさ稲穂いなほが置かれていたと考えています。

はっくつ  
〈発掘調査の様子〉



〈納められていた稲穂のイメージ〉



しょうそう  
正倉⑨～⑮ Ⅲ期

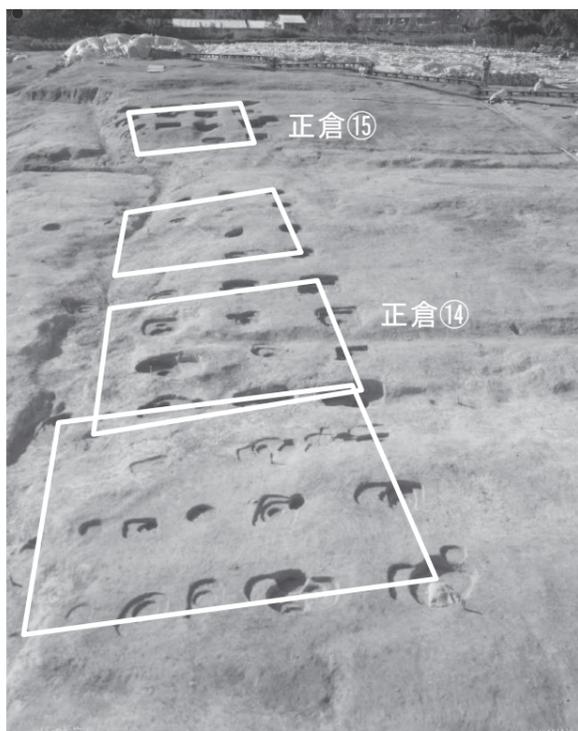
(説明板 7/8)

8.4×5.6 m<sup>2</sup>～5.0×3.9 m<sup>2</sup> 面積 19.5～47.0 m<sup>2</sup> (畳<sup>たたみ</sup> 12～30 枚分)  
柱間 1.7～2.1m

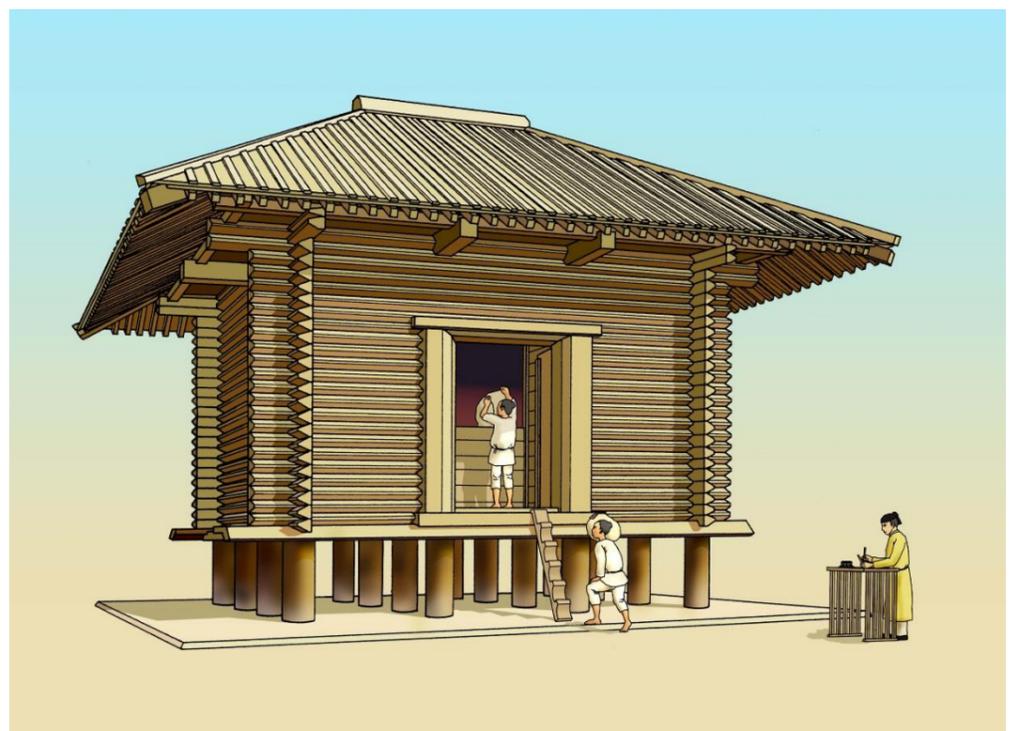
税として集めた米などの穀物<sup>こくもつ おさ</sup>が納められていた倉庫が、列をなして並んで<sup>なら</sup>いました。

傾斜地<sup>けいしゃち</sup>を階段状に造成して、正倉は建てられていました。

はくつ  
<発掘調査の様子>



東西に並ぶ正倉



正倉イメージ

しょうそういんほり いけみぞ  
**正倉院堀（池渠）⑩** Ⅲ期 （説明板 8/8）

東西約 70m×南北約 100m

はば  
幅2.0～4.2m、深さ 1.0m以上

正倉を取り囲んでいる堀です。出入口として、数か所、地面が掘り残されて  
いました。

古代の法律では、正倉の周囲には、防火・防犯のため堀を掘ることになっ  
ていました。

はくつ  
〈発掘調査の様子〉



堀の様子



出入口の様子